特集ワイド

主人公は知的障害者

画面の中で、若い女性が涙をポロポロ流しながら真剣に訴えている。「お母さんになりたいのに。なんでなれないの？　なんで？」……「バカだから？」。知的障害のある女性の子育てをテーマにした連続ドラマ「だいすき!!」（TBS系、木曜午後10時）が始まった。香里奈さん演じる主人公柚子が、さまざまな困難を乗り越えながら、娘ひまわりを愛し、懸命に育てる姿を描く。初回（17日）放送後の番組ホームページへのアクセス数が24時間で約150万件となるなど大きな反響を呼んでいる。なぜ今、障害者のドラマが私たちの心を打つのだろう。【中川紗矢子】

「だいすき!!」のプロデューサー、山本和夫さん（52）を撮影現場の緑山スタジオ（横浜市）に訪ねた。山本さんがドラマ化を決めた理由は何だったのだろう？

「今の社会は、次々に新しいものが出てきて、みんな必死で追い付き、適応しないといけないと思っている。僕は社会全体が魂をすり減らして適応障害を起こし、自分らしさ、人間らしさを失ってしまっていると思う。障害のある彼らは、そうしたものに適応できないかもしれない。でも、人間本来の感情を持っている。彼らの存在を見直し、生き方やひたむきな心に同化することで、私たちもカタルシス（浄化）に浸れるのではないか、と思ったからです」

その意識は社会全体に向いている。

「（原作の漫画を読んだ時）我々が直面している子育て問題を真っ正面からとらえていて、家族に障害者がいなくても、子育てという点で共感してもらえるのではないかと思ったんです。昔は地域で子育てしていたのが、今はたった一人の問題になってしまっている。けれど、このドラマでは、柚子たちを支えることが、周りの人たちにとって、かえって力をもらう支えになっている。そういう在り方の美しさをぜひ描いてみたいと思っています」

子育て問題 真っ正面から

原作は愛本みずほさんの漫画「だいすき!!」

TBSドラマ「だいすき!!」

長男（4）の父親でもあり、子育ての大変さを実感しながら考えたという。「他の人たちは、どういう子育てをしているのだろう？」。そして、以前、知的障害のある女性の恋愛を扱ったドラマ「ピュア」（フジテレビ系）を見て感じていた「障害者が恋愛した後は、どうなるのだろう？　それが結婚、出産と進んだとしたら？」という思いが、岩間さんを後押しした。

取材を進めると、障害のある人が出産し、子育てしている現実があることが分かった。「でも、普通の人はみんな知らない。知らないと、たとえば隣に引っ越してきても周囲が対応できない。まずは知ってもらうことに絶対意義がある」と確信したという。

漫画は、実際の取材を基本にしながら、温かく可愛い絵柄で漫画を描く愛本みずほさんが担当してくれた。大阪出身の愛本さんらしく、ギャグをちりばめた明るいストーリーができあがった。連載がスタートすると、読者アンケートで1位を獲得。読者に30代の子育て世代が多いこともあり、「励ましになる」「柚子もがんばるなら、私も」といった反響が多く寄せられた。

岩間さんは「子育ては誰がやっても困難はある。柚子の場合はそれが障害だっただけ。誰でも助けは必要だ。特別視せず、障害者としてではなくて、一人の母親、女性ということに注目してもらえるとすごくうれしい」と話す。

◆清らかなもの求め

障害者福祉の出版社勤務を経て、現在は行政書士として障害者の成年後見などをしている小林英樹さん（49）は、マイノリティーという視点で障害者ドラマを分析してきた。

90年代に起きたブームは「バブルで踊らされた日本で、欲望世界の対極にある障害者の純粋無垢なイメージが、人々の共感を呼んだ」と見る。その後も途切れることなく障害者ドラマが作られていることについては「現在も日本の社会は経済至上主義、拝金主義で、バブル崩壊後と基本的には変わらない。だから、その反対にある清らかなもの、天使的なものが求められるのではないか」と話す。一方で、天使的なものとの表現方法は、時代の成熟とともに、徐々に現実に即してきているようだ。

関係者に聞く限り、番組の作り手も、それを分析する側も一様に口にしたのは「障害者理解につながってほしい」ということだった。実際は、どうなのだろうか。

特別じゃない 同じ母親

子育て（左）の懸命な子育ては、周囲に支えられながら進んでいく。
に成長したひまわりを抱いて、幼稚園でママ友達ができたこと
報告する柚子と、順調ぶりを喜ぶ家族ら＝TBS提供

「私もがんばる」反響大きく

描かれ方 社会の価値観反映

斉藤慎一さんは、「日常で直接接することがない人であればあるほど、視聴者に与える影響は大きい」と話し、だからこそ、「多くの人にとって日常的に接する機会が少ない障害者を描く際には、現実に即した形で表現することが重要だ」と指摘する。

ドラマでの登場人物の描かれ方は、社会の価値観を反映しているという。斉藤さんによると、障害者への意識が低かった80年代以前は、ほとんど登場しないか、登場する場合でもかなり否定的に描かれていた。それが、93年に障害者基本法が制定されるなど障害者理解が進む流れの中で、障害者が登場するドラマが頻繁に制作されるようになった。

必要以上に美化されるなど偏って描かれる問題点はあるものの悪く描かれることがなくなり、手話ブームで手話への違和感がなくなるなど、プラスの影響もあった。

斉藤さんは「極端な表現で描かれる時期を経て、90年代には『障害者ドラマ』という言われ方が出てきた。流れとしての次のステップとして、今後は障害者ドラマとことさら言われることなく、『障害者が登場するドラマ』が当たり前になる時代が来るのでは」と語る。

TBSによると、初回の放送終了後にホームページなどに寄せられた感想は「柚子がんばって」や「知的障害のある方たちのことが少し分かった」など、肯定的な応援メッセージが大半だったという。

柚子の子育てを「障害者もの」としてではなく、「子育てもの」としてとらえること